

平成28年度アドバイザー派遣事業実施レポート

鳥取県立米子養護学校

- 1 研修テーマ 「一人一人をみつめ、自立と社会参加につなげる授業づくり」
- 2 実施期日・会場 1回目 … 平成28年 7月 1日 (金) 9:50~16:30
2回目 … 平成28年11月11日 (金) 9:50~16:40
- 3 アドバイザー 青森県教育庁学校教育課特別支援教育推進室指導主事 菊地 一文 氏
- 4 研修内容

【1回目】

各学部の2グループずつ授業を参観していただき、授業改善に向けて指導、助言をいただいた。午後は、『キャリア教育の視点を取り入れた授業づくり~キャリア発達を支援する教育の意義と実践~』をテーマに講義をしていただいた。

指導助言・講義の内容

- (1) 小学部2学級 『まなびタイム』(自立活動・国語・算数)
 - ・『まなびタイム』の構成が複雑・曖昧である。『まなびタイム』のねらいが何かを整理したほうがよい。
 - ・STの役割が何か。見本となる教員がいることで、子どもの活動が充実できるよう教員の役割分担を見直していく。
 - ・集団学習では、「共通のねらい」があること。小学部段階では、「やりきる」ことが大切。待ち時間を少なくして、一緒に何かをする「協働」「やりとり」の場面を充実させるとよい。
 - ・何かを伝える場合には、「対教員」ではなく友達に向けて伝えられるように。
- (2) 中学部2グループ 『作業学習』 木工部(単一学級)・ものづくり部(重複学級)
 - ◎生徒が落ち着いてまじめに取り組んでいる。タブレットを使つてのフィードバックも効果的である。
 - ・教員の配置人数が多い。授業をタブレットで撮影して、フィードバックするなど役割を見直してみては。
 - ・報告が目標となっているが、できている。自分の担当する作業ができたかどうかの判断を教員がするのではなく、自分で考えて判断できるように。「できた。」と判断したのはどうしてか、その考えを引き出すように。
 - ・自分でどんどん活動する。生徒同士の活動など。生徒同士のやり取りの中で、発信力と受信力を高めていく。
 - ・「作業学習としてのねらいは何か」を考える。
- (3) 高等部2グループ 『作業学習』流通班(単一学級)・手芸班(重複学級)
 - ◎生徒がやるべきことを分かって動いている。
 - ◎終わりのミーティングで、生徒が中心になって振り返る場面が設定されていることがよい。先生方の生徒の言葉の引き出しもよい。
 - ◎手芸班では、個人評価や教員評価、全体で発表するなど多様な評価場面があるのがよい。
 - ・形式的な報告はできているので、報告の質を高め、実社会に近い報告の仕方を検討する。
 - ・前回の反省で出た点を、そのまま次回の目標として生かすなど、生徒の目標に連続性を持たせる。
 - ・作業学習で学ぶ内容、目標の整理を。
- (4) 講義、その他全体として
 - ◎鳥取県は、施設環境面、人的面ともに充実している。
 - ・その授業・教科のねらいをしっかりと持つこと。合わせて評価の方法をみつめなおしていくとよい。
 - ・講義では、「キャリア教育」「キャリア発達」とはどういうことか、多くの実践例を紹介していただきながら分かりやすく説明していただいた。内面の変化を捉えていくことが大切であり、子どもの願い=PAT Hの実施をするとよいこと、本校でのキャリア教育とは何か職員での対話が必要であり、みんなで納得して取り組むことの重要性等、多くの助言をいただいた。

【2回目】

前回の指導助言をもとにそれぞれ授業改善を行った。各学部1授業を参観していただき、それぞれの授業について成果や今後の課題等、指導助言をいただいた。また、講義では『早期から教育活動全体をとおして組織的に取り組むキャリア発達を支援する教育』と題して講義をしていただいた。

指導助言・講義の内容

- (1) 小学部重複障がい学級 『まなびタイム』(自立活動・国語・算数)
 - ◎プロジェクター等の機器が効果的に活用されている。
 - ◎子どもたちの学習態勢がよくできている、落ち着いているだけでなく学習に意欲的に取り組んでいる。数ヶ月前と比べて確かな学びがある。
 - ・『まなびタイム』の授業における目標・内容・方法を教育課程上から見直し、整理するとよいのでは。
⇒ねらいが明確になる ⇒支援や手立ても明確に ⇒子どもが何をすればよいか分かる
⇒子どもが求められていることを振り返って自分で評価できる
 - ・教育的ねらいが子どもの生活にとって必然性のあるものに ⇒ 子どもたちの意欲につながる
- (2) 中学部単一学級 『作業学習』木工部
 - ◎先生方の意図がよく伝わってくる授業であった。
 - ◎手厚い指導になるだけではなく、ICTも効果的に活用され全体を把握しながら適宜フィードバックできるような人的・物的環境となっていた。
⇒ 生徒が自分のペースで活動するだけではなく、お互いの状況を確認して助けあう、やり取りができるようになっていくとよい。
 - ・4つの観点評価で授業をみていくとよい。
その中で、眼に見えにくい【思考】にアプローチするために、考えなければならないこと、自分だけではできないこと、他者と協働しないとできないことが仕組みられていくとよい。
 - ・【表現】の観点で、生徒が自分の言っていることが相手に伝わっているかどうかを認識できていない。言ったらよいではなく、どう気づかせるか。
 - ・生徒が同じ作業工程を行うことでできるようになったこともある。次の段階として違う工程・役割を変えることで、互いの工程の意味や必要性も理解でき、セルフチェックの精度を上げるという、授業のねらいにより迫ることにもつなげられるのでは。
- (3) 高等部単一学級 『作業学習』流通班
 - ◎「報告」の意味や必要性を授業で再確認したことが、具体的に生徒に理解できていた。単なる報告ではなく、注意喚起や周囲に進捗状況を伝え合う、また自分で考えてから伝える報告となっていた。
 - ◎配膳という作業も単なる繰り返しではなく、盛り付ける内容でトラブルが起こる。今回のトラブル解決は「主体的」で「対話的な学び」となっていた。グループでの振り返りの場面で教師が介入しすぎず、どうしたらよいか考えさせるような問いかけもあり、「深い学び」の兆しも見られた。今後「アクティブラーニング」につなげていける授業であった。
 - ・作業学習で培った力が他のいろいろな場面や学習の場面（総合の学習のときの話し合いの場面）にどのよう
に般化されるのか。他の学習や生活との関連性もみていくとよい。
- (4) 講義、その他全体として
 - ・講義では、次期学習指導要領の改訂のキーワードや学習評価の意義についても話をいただいた。本校の取組をみると、新しいことに取り組んでいくのではなく、現在行っている教育活動を整理し、充実させていけばよいという方向性を示していただいた。
 - ・前回から4ヶ月の中で、多くの先生方がそれぞれ工夫してキャリア教育の視点を取り入れた授業実践に取り組みその成果や、各学部の授業を通して見ることで各学部の取り組みが繋がっていることを確認することができた。

4 まとめ

年度当初は、職員が「キャリア教育」をととても難しく捉えていた。菊地先生の講義を受け、それぞれが自分なりにキャリア教育の視点を工夫して授業実践に取り入れる中で、授業改善への意識を高めることができた。また、本校でつきたい力「5つの力」の作成や各分掌・教科領域で学部間の系統性やつながりを見直していく等、キャリア教育の視点で教育活動全体を見直していくことにもつなげることができた。今後も菊地先生の助言を参考に教育活動を見直し整理し、児童生徒のキャリア発達を支援する授業づくりへとつなげていきたい。